

日蓮聖人教学における仏法の弘通（二）

―四依の菩薩を中心として―

庵谷行亨

一 はじめに

本稿は、能弘の師である「四依の菩薩」を中心として「日蓮聖人教学における仏法の弘通」について考察するものである。全体を三回に分けており、第一回は「日蓮聖人教学における仏法の弘通（一）」（『日蓮学』第四号）として、主に「五義の概要」「四依の菩薩」について述べた。

続いてここでは「日蓮聖人教学における仏法の弘通（二）」として、付法蔵と付嘱を視点として「仏法とその弘通者」、付嘱についての「天台大師の解釈」について検討したい。

さらに今後、「日蓮聖人教学における仏法の弘通（三）」（『身延論叢』第二十六号）として、「日蓮聖人教学における仏法弘通の次第」について考察する予定である。

二 仏法とその弘通者

仏法とその弘通者の関係については、付法蔵や付嘱等がある。付法蔵は仏法を付託すること、あるいは相承すること、付嘱は仏が教法を付しその弘通を委託することである。

1 付法蔵

付法蔵については、日蓮聖人は摩耶經^①・大悲經^②・『付法蔵因縁伝』^③等により、仏滅後における代々の弘通者とその役割を認識されていた。

『開目抄』には次のように述べられている。

①世尊付法蔵經に記云我滅後一百年に阿育大王という王あるべし。摩耶經云、我滅後六百年に龍樹菩薩という人南天竺^④出べし。

大悲経云、我滅後六十年に末田地という者地を龍宮につく(築)べし。此等皆仏記のごとくなりき。⁽⁴⁾

② 仏付法蔵経等に記云、我滅後に正法一千年が間、我正法を弘べき人、二十四人次第に相続すべし。迦葉・阿難等はさてをきぬ。一百年の脇比丘、六百年の馬鳴、七百年の龍樹菩薩等一分もたがわず、すでに出給ぬ。此事いかんがむなしかるべき。⁽⁵⁾

付法蔵経(『付法蔵因縁伝』・摩耶経(摩訶摩耶経)・大悲経(大悲華経)によって仏法の継承者名を挙げ、それが歴史的事実と合致しているとして「仏記のごとくなりき」「二分もたがわず」「いかんがむなしかるべき」と述べられている。

『十月分時料御書』には次のように述べられている。

摩訶摩耶経云六百年馬鳴出、七百年龍樹出。付法蔵経云第十一馬鳴第十三龍樹等云云。⁽⁶⁾

摩訶摩耶経と付法蔵経とによって、論師出現の時や付法蔵の順番を挙げられている。

『大夫志殿御返事』には次のように述べられている。

滅後の一日より正像末二千二百余年が間仏の御使二十四人なり。所謂第一大迦葉・第二阿難・第三末田地・第四商那和修・第五俄多・第六提多迦・第七弥遮迦・第八仏駄難提・第九仏駄密多・第十脇比丘・第十一富那奢・第十二馬鳴・第十三毘羅・第十四龍樹・第十五提婆・第十六羅睺・第十七僧宛難提・第十八僧宛耶奢・第十九鳩摩羅駄・第二十闇夜那・第二十一盤駄・

第二十二摩奴羅・第二十三鶴勒夜奢・第二十四師子尊者。此二十四人金口所記付法蔵経載。但小乗権大乘経御使也。いまだ法華経の御使にはあらず。三論宗云道朗・吉蔵仏使也。法相宗云玄奘・慈恩仏使也。華嚴宗云法蔵・澄観仏使也。真言宗云善無畏・金剛智・不空・慧果・弘法等仏使也。日蓮勘之云全非仏使。全非大小乗使。⁽⁷⁾

付法蔵二十四名の名を挙げ、これらは「小乗・権大乘経の御使」であり、「法華経の御使」ではないとし、併せて諸宗の諸師もまた「仏使」でも「大小乗の使」でもないとされている。このように日蓮聖人は、付法蔵経(『付法蔵因縁伝』)等の説示に基づいて仏滅後の弘通者を具体的に指摘し、諸宗諸師の位置づけについても言及されている。

日蓮聖人にとって、付法蔵の人々は単に仏法を相承したということではなく、数々の難に遭遇しながらもそれに耐えてきた先師でもあった。

文永八年一〇月五日に相模国依智で記された『転重軽受法門』には次のように述べられている。

又付法蔵二十五人は仏をのぞきたてまつりては、皆仏のかねて記をき給る権者なり。其中第十四提婆菩薩は外道にころされ、第二十五師子尊者は檀弥栗王に頸を刎られ、其外仏陀密多・龍樹菩薩なども多の難にあへり。⁽⁸⁾

涅槃経の転重軽受法門について説明し、不軽菩薩の値難の意義を

述べ、さらに付法蔵の人々の値難を挙げて弘法弘通と値難の必然性を明かし、龍口斬首の法難に加え佐渡に流罪されていく自身の正統性を示されたものである。

『開目抄』には次のように述べられている。

不軽品云悪口罵詈等。又云或以杖木瓦石而打擲之等云云。涅槃經云若殺若害等云云。法華經云而此經者如来現在猶多怨嫉等云云。仏は小指を提婆にやぶられ、九横の大難に値給。此は法華經の行者にあらずや。不軽菩薩一乗の行者といわれまじきか。目連は竹杖に殺る。法華經記萌の後なり。付法蔵の第十四提婆菩薩・第二十五の師子尊者二人は人に殺ぬ。此等は法華經の行者にはあらざるか。⁽⁹⁾

法華經・涅槃經の經文によつて弘通者の値難について述べられている。釈尊さえも九横の大難に遭遇され、仏弟子や付法蔵の人々もこぞつて大難に値われたことから、ましてや末法の世に法華經を弘通する者は大難に値うことは必然的である。この事実をもつて、値難の付法蔵者は「法華經の行者にはあらざるか」とされている。

『報恩抄』には次のように述べられている。

馬鳴・龍樹菩薩等は仏滅後六百年七百年等の大論師なり。此人々世にいで、大乘經を弘通せしかば、諸々の小乗者疑云、迦葉・阿難等は仏の滅後二十年四十年住寿し給て、正法をひろめ給しは如来一代の肝心をこそ弘通し給しか。而に此人々は但苦・空・無常・無我の法門をこそ詮とし給しに、今馬鳴・龍樹

等かしこしといふとも迦葉・阿難等にはすぐべからず。是一。迦葉は仏にあひ(値)まいらせて解をえたる人なり。此人々は仏にあひたてまつらず。是二。外道は常樂我淨と立しを、仏世に出させ給て苦・空・無常・無我と説せ給き。此ものどもは常樂我淨といへり。是三。されば仏も御入滅なりぬ。又迦葉等もかくれさせ給ぬれば、第六天の魔王が此ものどもが身に入かりて仏法をやぶり、外道の法となさんとするなり。されば仏法のあだをば頭をわれ、頸をきれ、命をた(断)て、食を止めよ、国を追へと、諸の小乗の人々申せしかども、馬鳴龍樹等は但一人なり。昼夜に悪口の声をきき、朝暮に杖木をかうふ(被)りしなり。而ども此二人は仏の御使ぞかし。正く摩耶經には六百年に馬鳴出て、七百年に龍樹出んと説かれて候。其上、楞伽經等にも記せられたり。又付法蔵經には申をよはず。されども諸の小乗のものどもは用ず。但理不尽にせめしなり。如来現在猶多怨嫉況滅度後の經文は此時にあたりて少しつみしられけり。提婆菩薩の外道にころされ、師子尊者の頸をさられし、此事をもつておもひやらせ給へ。⁽¹⁰⁾

仏滅後の付法蔵の先師が数々の難に値いながら弘法に身命を捧げた事例を具体的に挙げ、「此事をもつておもひやらせ給へ」と自身の値難が付法蔵の先師に連なるものであることを示し、「法華經の行者」としての正統性を示されている。

付法蔵は二十三人説・二十四人説・二十五人説がある。これは釈

尊を加えるか否かと阿難伝中の末田地の取り扱いによる相違である。『大夫志殿御返事』では二十四人、『転重軽受法門』では二十五人、『開目抄』では二十四人と二十五人の両方の記載が見られる。

2 付嘱

日蓮聖人における付嘱の法門は、法華経如来神力品第二十一所説の別付嘱を正意とする。日蓮聖人は、別付嘱に至る法華経の教えを虚空会を中心とした経説に立脚して受容されている。それを端的に示すものが起顕竟の法門である。『新尼御前御返事』には次のように述べられている。

今此の御本尊は教主釈尊五百塵点劫より心中にをさめさせ給、世に出現せさせ給ても四十余年、其後又法華経の中にも迹門はせずして、宝塔品より事をこりて寿量品に説き顕し、神力品属累に事極て候しが、(略)我五百塵点劫より大地の底にかくしをきたる真の弟子あり。此にゆづるべしとて、上行菩薩等を涌出品に召出させ給て、法華経の本門の肝心たる妙法蓮華経の五字をゆづらせ給て^①。

起顕竟の法門の概要は次のとおりである。見宝塔品は虚空会の始まりで、宝塔中に二仏並坐された釈尊が「三箇の勅宣」を發して滅後の弘経を勸奨された。これを承けて勸持品では会座の菩薩・声聞達が此土・他土の弘経を誓い「二十行の偈」を述べて「我不愛身命但惜無上道」の決意を示す。従地涌出品で釈尊は他土の菩薩の弘経

の請いを斥け、大地の下より地涌菩薩を召出し、弥勒菩薩の問いに答えて、地涌菩薩は「久遠教化の弟子」(久遠の弟子)であることを明かされた。如来寿量品では釈尊の久遠本事(久遠実成の仏)を開顕し、「顛倒の凡夫」(末代の劣悪機)を救済する良薬(妙法)、および娑婆世界が常住の浄土であることを示された。如来神力品では地涌菩薩の滅後弘経の誓いを受けて十神力を現じ、法華経を要法に結んで上行等の地涌菩薩に付嘱されたのである。人においては別付嘱、法においては結要付嘱である。

起顕竟を要約すると、起は、法師品の「滅後の弘経」と見宝塔品の虚空会における「三箇の勅宣」、顕は、従地涌出品の「本化涌出」と如来寿量品の「久遠実成の開顕」、竟は、如来神力品の「結要の別付嘱」である。これによって、本師(久遠実成の仏・三身顕本の仏)、本法(久成の法・要法の題目)、本土(常住の浄土・娑婆浄土)、本化(地涌菩薩・上行菩薩)が開顕され、如来滅後末法の仏法が決せられたのである。

三 天台大師の解釈

日蓮聖人が虚空会に見た起顕竟の法門は、天台大師の法華経解釈に立脚したものである。天台大師は宝塔品・涌出品・寿量品・神力品等の解釈において、地涌菩薩への要法付嘱の必然性を論じた。日蓮聖人はこれを承けて「末法における仏法弘通の大事」を法華経の

歴史の必然と捉え、その実現に邁進されたのである。

1 宝塔品の証前起後

宝塔の涌現について天台大師は『法華文句』巻八に次のように釈している。

塔を出すを両となす。一に音声を発してもつて前を証し、塔を開きてもつて後を起こす。証前とは三周の説法は皆これ真実なることを証す。(略)起後とはもし塔を開かんと欲せばすべからく分身を集めて玄を明かして付嘱すべし。声は下方に徹し、本弟子を召して寿量を論ず。⁽¹²⁾

証前は多宝如来の「善哉善哉の音声」で迹門の教えが真実であることの証明、起後は「開塔」で本門を起こす、とする。さらに起後に「分身来集」「明玄」「付嘱」「声徹下方」「召本弟子」「論寿量」の義を見ている。「分身来集」は釈尊の久遠性、「明玄」は付嘱の法が要法であること、「付嘱」は別付嘱の儀、「声徹下方」は本弟子地涌菩薩の召出、「論寿量」は釈尊の久遠実成(顕本)を示したもので、本門の涌出品・寿量品・神力品を踏まえた解釈である。

日蓮聖人はこの釈を承けて『開目抄』に次のように述べられている。

証前の宝塔の上起後の宝塔あて、十方の諸仏来集せる、皆我が分身なりとならせ給、宝塔は虚空に、釈迦・多宝坐を並べ、日月の青天に並出せるがごとし。(略)これ寿量品の遠序なり。

始成四十余年の釈尊、一劫十劫等已前の諸仏を集て分身ととかる。(略)天台云分身既多当知成仏久矣等云云。⁽¹³⁾

宝塔品の証前起後を「寿量品の遠序」とされている。宝塔品は迹門の経説であるが、虚空会の儀に本門を見ることは天台大師の釈によっている。日蓮聖人は宝塔品・勸持品・涌出品・寿量品・神力品と続く虚空会の経説に「仏滅後末法の法華経」を覚知されたのである。

2 宝塔品の付嘱有在

宝塔品の「付嘱有在」について天台大師は『法華文句』巻八に次のように釈している。

此に二意あり。一に近令有在とは八万二万の旧住の菩薩に対して此土に弘宣せしむ。二に遠令有在とは本弟子の下方千界微塵に付して触処に流通せしむ。また寿量を發起するなり。⁽¹⁴⁾

宝塔品の「付嘱有在」を近令有在と遠令有在に分類し、近令有在は旧住菩薩の此土弘宣、遠令有在は本弟子地涌菩薩の触処(此土・娑婆世界)流通とする。

これに対し妙楽大師は『法華文句記』に次のように釈している。明玄等と言うは略して経題を挙ぐるに玄に一部を収む。ゆえに仏欲以此妙法等と云うなり。⁽¹⁵⁾

天台大師が菩薩に視点を当てて旧住と下方の弘通と積したに対し、妙楽大師は教法に視点を当てて一部を収めた玄(要法)の付嘱

としている。両釈を総合すると「遠令有在の本弟子地涌菩薩は一部を収めた玄(要法)を娑婆世界に弘通する」ことになる。

日蓮聖人は『開目抄』において宝塔品の「付囑有在」を「第一の敕宣」、「令法久住」を「第二の鳳詔」、六難九易を「第三の諫敕」と述べられている。「三箇の敕宣」を釈尊の嚴命と受け止めた日蓮聖人は、涌出品・寿量品・神力品等の経説を受けて、「遠令有在の本弟子地涌菩薩が要法の題目を此土(娑婆世界)に弘通することの必然性」を確信されたのである。

3 涌出品の止召六義

涌出品において、「釈尊が他方の菩薩の弘経の請いを止め、地涌菩薩を召出された」ことについて、天台大師は『法華文句』巻九にその理由を詳しく説明している^①。要約すると次のとおりである。

他方の菩薩の弘経を制止する理由(止三。迹化を止めるに三義あり)

- ① 他方の菩薩はそれぞれの国土を利益する任務がある。
- ② 他方の菩薩は此土(娑婆世界)との結縁が浅い。
- ③ 他方の菩薩に任すと下方(地涌菩薩)を召し出すことができない。ず、仏の久遠実成を開顕することができない。

地涌菩薩を召出する理由(召三。本化を召すに三義あり)

- ① 久遠の弟子(地涌菩薩)に久遠の仏の法を弘通せしめる。
- ② 下方(地涌菩薩)は此土(娑婆世界)との結縁が深広である。

③ 仏の久遠を開顕(開近顕遠)することができる。

止召の六義は前三後三の六釈とも称する。天台大師は寿量品・神力品を見通して涌出品の止召を釈している。「久遠の仏」の「久遠の弟子」が「久遠の法」を「結縁深広」の「娑婆世界」に弘通するとの視点は、本仏・本化・本法・本土を示している。天台大師は宝塔品と共に涌出品に「本門世界の必然」を見たのである。日蓮聖人はこのことについて諸遺文に言及されている。

『観心本尊抄』には次のように述べられている。

涌出品云爾時他方国土諸來菩薩摩訶薩過^三八恒河沙數^於大衆中^{一起立合掌作}礼而白^レ仏言世尊若聽^六我等^於於^三此娑婆世界^{勤加精進護持誦書}寫^五供養是經典者^當於^三此土^{而広説}之。爾時仏告^三諸菩薩摩訶薩衆^一止善男子不^レ須^三汝等護^三持此經^等云云。(略)天台智者大師作^三前三後三^六六^二會^一之。所詮迹化・他方大菩薩等以^三我内証壽量品^不可^レ授与。末法初謗法国惡機故止^レ之召^三地涌千界大菩薩^一壽量品^{肝心}以^三妙法蓮華經^五字^一令^レ授^三与閻浮衆生^二也。又迹化大衆非^三釈尊初發心弟子等^一故也。天台大師云是我弟子^三應^レ弘^三我法^一。妙樂云子弘^三父法^一有^三世界益^一。輔正記云以^三法是久成法^一故付^三久成之人^一等云云。^②

涌出品における他方の菩薩の弘経の請いと釈尊の制止の経文を受けて、天台大師の「前三後三の六釈」が挙げられている。末法の初は「謗法の国」「悪機」なるゆえに、「迹化・他方の大菩薩等」には「我内証の壽量品」は授与されなかつたとし、「釈尊の初發心の弟子」

である「地涌千界の大菩薩」を召して「寿命品の肝心たる妙法蓮華經の五字」を「閻浮の衆生」に「授与」せしめた、とされている。

これを論証するものとして、天台大師の『法華文句』、妙楽大師の『法華文句記』、道暹の『法華文句輔正記』が挙げられている。『法華文句』は師弟、『法華文句記』は父子、『法華文句輔正記』は久成の法による解釈である。師の法を弟子が弘めるとは「久遠釈尊の法を久遠弟子である地涌菩薩が弘める」、子が父の法を弘めるとは「久遠の仏子である地涌菩薩が父なる久遠釈尊の法を弘める」、法が久成なるゆえに久成の人に付すとは「久遠法を久遠人である地涌菩薩に付嘱する」の意である。要約すれば「久遠釈尊の久遠法を久遠弟子であり仏子である地涌菩薩が弘める」となる。能付の仏と所付の菩薩の久遠なる師弟・父子の關係と、所対の久遠法が、密接に關連して「付嘱の儀」が成就したのである。

『曾台入道殿許御書』には次のように述べられている。

而地涌千界大菩薩一住於娑婆世界多塵劫。二隨於釈尊自久遠已來初發心弟子。三娑婆世界衆生最初下種菩薩也。如是等宿緣之方便超過於諸大菩薩。問曰其証如何。法華第五涌出品云爾時他方国土諸來菩薩摩訶薩過八恒河沙數乃至爾時仏告諸菩薩摩訶薩衆止善男子。不須汝等護持此經等云云。天台云他方此土結緣事淺。雖欲宣授必無巨益云云。妙樂云尚不偏付他方菩薩。豈独身子云云。又天台云告八万大士者乃至如今下文召於下方尚待本眷屬。驗。余未堪云云。經

釈之心迦葉・舍利弗等一切声聞文殊・藥王・觀音・弥勒等迹化他方之諸大士不堪於末世弘經云也。經云我娑婆世界自有六万恒河沙等菩薩摩訶薩。一菩薩各有六万恒河沙眷屬。是諸人等能於我滅後護持誦誦說此經。仏説是時娑婆世界三千大千国土地皆震裂而於其中有無量千万億菩薩摩訶薩同時涌出。乃至是菩薩衆中有四導師。一名上行二名無辺行三名淨行四名安立行。於其衆中最高上首唱導之師等云云。天台云是我弟子心弘我法云云。妙樂云子弘父法云云。道暹云付屬者此經唯付下方涌出菩薩。何故爾。由法是久成之法故付久成之人等云云。此等之大菩薩利益末法之衆生猶如魚練水鳥自在於天。濁惡之衆生遇此大士殖於仏種例如魚精之向月生水孔雀聞雷声懷妊。天台云猶如百川心須潮海。緣牽応生亦復如是云云。

末法の悪世に地涌菩薩が涌出して娑婆世界に弘通することの理由を、娑婆結縁・久遠來初發心弟子・娑婆衆生最初下種菩薩とし、その証拠を糺す問いに答えて、前掲の『觀心本尊抄』と同じく、涌出品、天台大師の『法華文句』、妙楽大師の『法華文句記』、道暹の『法華文句輔正記』等を挙げて証明されている。叙述内容は『觀心本尊抄』よりも詳細である。地涌菩薩を召出する理由として、地涌菩薩は、本眷屬（久遠本時の眷屬）、我弟子（久遠仏の弟子）、子（久遠の父の子）、久成之人（久遠の人）、縁牽応生（縁に牽かれて応生する眷屬）等が挙げられている²⁰。

4 神力品の結要付嘱

神力品の「上行等の菩薩への付嘱」について、天台大師は『法華文句』巻一〇に「結要付嘱」と釈している。

これについて日蓮聖人は『観心本尊抄』に次のように述べられている。

經云爾時仏告上行等菩薩大衆(略)以要言之如来一切所有之法
如来一切自在神力如来一切秘要之藏如来一切甚深之事皆於此經
宣示顯說等云云。天台云從二爾時仏告上行二下第三結要付嘱云
云。⁽²⁾

神力品の文を受けて天台大師の『法華文句』の釈が挙げられている。宝塔品の勅宣、涌出品の地涌召出、寿量品の顕本、神力品の付嘱という仏滅後の法華經を決定づける虚空会の經説を、日蓮聖人は天台大師等の解釈に添って受け止め、末法為正・本門為体の視点から体系付けられたのである。

四 むすび

仏法の相承を示す付法藏は、摩訶摩耶經・大悲華經・付法藏經(『付法藏因縁伝』)などによって、具体的な歴史上の人々が挙げられている。日蓮聖人はこれを仏の未來記として受容し、仏語の真实性を表すものとされた。

また、釈尊とその弟子および付法藏の人々が、数数の難に値遇し

ていることから、仏法弘通者は値難と共にあるとし、値難をもって眞実の弘法者とされている。日蓮聖人の「法華經の行者」としての確信は、このような「弘教と値難の体験」を基盤とするものであった。

付法藏が歴史上の人物の仏法相承であるに対し、付嘱は法華經虚空会の儀相による釈尊と本弟子地涌菩薩との弘教の約束である。仏滅後末法の弘通者としての位置づけはひとえに付嘱によるものである。

日蓮聖人が、法華經虚空会における「本化の誓言と釈尊の付嘱」を釈尊による「滅後の法華經」として受け止めたのは、天台大師・妙楽大師等の解釈に基づいている。とくに見宝塔品・從地涌出品を如来寿量品・如来神力品の經意を受けて理解することによって、日蓮聖人はこれを「付嘱の大事」と認識し、その具現を確信されたのである。

日蓮聖人は、正像末三時における仏法弘通の次第を、涅槃經の四依の説示に立脚し、歴史上の付法藏と法華經の虚空会説法(付嘱の大事)とによって、総合的に体系付けられた。それは、ひいては日蓮聖人の仏教史観、法華經史観の骨格となるものであった。日蓮聖人が仏教の体系を図示された各種の一代五時図は、その概要を系統立てて説明したものである。また、『撰時抄』『報恩抄』等を初めとする諸遺文に叙述される三国仏教史は、この綱格に基づいて展開されている。

註

- (1) 摩訶摩耶經。釈雲景訳。仏滅後の仏法に関する説示中に弘法者として馬鳴・龍樹の名前が見られる。日蓮聖人は仏説として受容されている。
- (2) 大悲華経とも称する。那連提耶舎訳。仏が涅槃に臨み仏法の付嘱と仏滅後の弘通者について説示する。日蓮聖人は仏説として受容されている。
- (3) 元魏延興二年(四七二)、吉伽夜・曇曜の共訳と伝えられているが、阿育王経・『龍樹菩薩伝』・『馬鳴菩薩伝』・『提婆菩薩伝』などからの引用や改編があることから、今日では偽撰と考えられている。天台大師の『摩訶止観』は『付法蔵因縁伝』の二十三祖に末田地を加えて二十四祖とする。天台大師や日蓮聖人は仏説として受容されている。
- (4) 『昭定』五六〇頁・曾。
- (5) 『昭定』五九三頁・曾。
- (6) 『昭定』一五八八頁・真。
- (7) 『昭定』一八五一頁・断。
- (8) 『昭定』五〇七頁・真。
- (9) 『昭定』五九九〜六〇〇頁・曾。
- (10) 『昭定』一二四四〜一二四六頁・曾・断。
- (11) 『昭定』八六六〜八六七頁・曾・断。
- (12) 『正蔵』第三四卷一一三頁a。原漢文。

- (13) 『昭定』五七一〜五七二頁・曾。
- (14) 『正蔵』第三四卷一一四頁b。原漢文。
- (15) 『正蔵』第三四卷三一一頁a。原漢文。
- (16) 『昭定』五八二〜五八三頁・曾。
- (17) 『正蔵』第三四卷一二四頁c。
- (18) 『昭定』七一五〜七一六頁・真。
- (19) 『昭定』九〇三〜九〇四頁・真。
- (20) 『本眷属』『縁牽応生』は『法華玄義』の本眷属妙を釈する中に見られる(『正蔵』第三三卷七五六頁c)。久遠釈尊と久遠本時に縁を結んだ本弟子(地涌菩薩)のことで、衆生を済度するために応生する(衆生済度の必要に應じて出現する)。
- (21) 『昭定』七二七〜七二八頁・真。
- 一 日蓮聖人遺文は立正大学日蓮教学研究編『昭和定本日蓮聖人遺文』(身延山久遠寺発行)による。
- 二 日蓮聖人遺文の真蹟・写本等については次のとおり表記した。
- 真 真蹟現存遺文
- 曾 真蹟曾存遺文
- 断 真蹟断片現存遺文
- 断簡 真蹟断簡現存遺文
- 写 直写本現存遺文
- 三 引用書名の略称は次のとおり表記した。

日蓮聖人教学における仏法の弘通（二）（庵谷）

『昭定』 『昭和定本日蓮聖人遺文』

『正蔵』 『大正新脩大蔵経』

〈キーワード〉 日蓮聖人教学 仏法 四依の菩薩 付法蔵 付嘱 証前起後

止召六義 天台大師 法華経の行者 値難